

手順説明談話における脱文脈化の様相

田中 弥生
神奈川大学・国立国語研究所

浅原 正幸 小磯 花絵
国立国語研究所 国立国語研究所

1 はじめに

日常会話では、いわゆるおしゃべりなどの雑談だけでなく、相手に何かを説明したり指導したりする談話が様々なレベルで行われている。本発表は、筆者らがやっている談話分析の一環として、手順を説明する談話は脱文脈化の観点からどのように分析できるかを検討するものである。ここで、話し手書き手のいる場所・時間、すなわち「いま・ここ・わたし」とその発話内容との空間的・時間的距離を脱文脈化の程度として表現する。例えば、「その本を取って」のようにその場にいる者の間で行為や物をやりとりする発話は脱文脈化程度が低く、「本は知識の源となる」のようなその場と関わらない発話は脱文脈化程度が高い。また、空腹な状況について「私は今お腹がすいている」と個人的なその時の状況を述べるのは脱文脈化程度が低いが、「人はお腹がすくものだ」のように一般的な事象として述べるのは脱文脈化程度が高い。

脱文脈化の程度の確認には、修辞ユニット分析の分類法を用いる。修辞ユニット分析は、選択体系機能言語理論の枠組で Cloran(1995,1999) によって提案された英語に対する分析手法で、佐野 (2010a)、佐野・小磯 (2011) によって日本語に適用されている。Cloran(1995,1999) では、英語の母子会話における家庭の社会経済状況と修辞機能及び脱文脈化の程度が分析され、佐野 (2010b) は、修辞ユニットの分類による専門性の観点から作文指導にこの概念を活用する方法を説明した。これまで、Yahoo! 知恵袋の QA 投稿や、化粧品クチコミサイト、児童作文、チラシ、子供会話など様々な談話やテキストについて脱文脈化の観点からの検討を行った (田中 2012,2018a,2018b, 田中・小磯 2019, 田中・佐野 2011) が、手順を説明する場面における談話について脱文脈化観点からの分析は行われておらず、本発表はパイロットスタディの位置付けとなる。本発表で使用するデータは、現在国立国語研究所において構築中の「日本語日常会話コーパス」(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC) (小磯ほか 2017) に格納予定の談話の一部である。

2 データと分析方法

2.1 データ

本発表で用いるデータは、共通の友人のいる初対面の女性 2 名の爪磨き指導場面 (ID:K011.005) のうち、話者 A が手順を示しながら説明している会話の冒頭の 12 分である。話者 A は仕事の一つとして爪磨き指導を行なっている。このような手順を説明する談話のやりとりの流れの中で、脱文脈化程度がどのような様相を示すか、確認する。

2.2 分析方法

修辞ユニット分析では、テキストを分析単位 (メッセージ) に分割し、分析対象となるメッセージについて、発話機能 (提言, 命題), 中核要素 (状況内, 状況外, 定言), 現象定位 (過去, 現在, 未来, 仮定) を認定し、その交差から修辞機能と脱文脈化指数⁽¹⁾を特定する。ここでは分類方法の概要を示す。詳細は佐野 (2010a,2010b), 佐野・小磯 (2011) を参照されたい。

2.2.1 分析単位

分析単位はメッセージである。メッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「位置付け」「拘束; 意味的従属」「拘束; 形式的従属」「自由」の 4 種類に分類する。「位置付け」は、「はい。」「あ。」「へー。」「ふーん。」や「よいしょ。」などの相槌や定型句、述部がなく復元もできないものや挨拶で、分析対象としない。「拘束; 意味的従属」は従属節のうち、「持ち歩くのにちょっと長いので」や「もし時間がなければ」のような理由や条件などを表しているもので、単独では分析しない。それ以外の従属節は「拘束; 形式的従属」で、主節の「自由」とともに、分析対象となる。

2.2.2 発話機能

メッセージの種類が「拘束; 形式的従属」及び「自由」と認定されたメッセージについて、発話機能を「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令などで、基本的には同じ場所、同じ文脈に存在する会話者が理解できる発話内容が該当

⁽¹⁾脱文脈化の程度を表す指数。

し、修辞機能は「行動」、脱文脈化指数は [1] と特定される。「命題」は、情報を交換する陳述・質問などが該当し、このあと中核要素と現象定位を認定する。

2.2.3 中核要素

中核要素は、メッセージが伝達される場所を基準として、メッセージの中心との空間的距離を示す要素である。基本的に主語によって表現され、「状況内」「状況外」「定言」に分類する。「状況内」は、中核要素がメッセージの送り手や受け手のいる場に存在する人や事象の場合に該当し、下位分類としてメッセージの伝達に参加している送り手・受け手を「状況内；参加」、参加していない人や事象は「状況内；非参加」に分類する。「状況外」は、中核要素がその場に存在しない人や事象の場合である。「定言」は、普遍的な性質などを述べているメッセージの主語が該当する。中核要素が省略されている場合には復元して認定する。

2.2.4 現象定位

現象定位は、メッセージが伝達される時間を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素で、基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「現在」「過去」「未来」「仮定」に分類する。メッセージの内容が、すでに起こった出来事であれば「過去」、その時に起こっていることであれば「現在」となる。「現在」のうち、一時的な事象であれば「現在；非習慣的・一時的」で、普遍的なことや習慣的な事象の場合には「現在；習慣的・恒久」に分類する。まだ起こっていないことで、これから起こる事象は「未来」で、意図を持って実行できるか否かによって「未来；意図的」か「未来；非意図的」に分類する。なんらかの条件のもとで出来事が起こる場合には「仮定」となる。

2.2.5 修辞機能と脱文脈化指数の確認

表 1 に修辞機能を特定するための中核要素・発話機能・現象定位の組み合わせを示す。表内の数字は脱文脈化指数で、図 1 のようにその談話の場に最も近い（脱文脈化指数が低い）ものから、その談話の場から最も遠い（脱文脈化指数が高い）ものまで配置されている。

脱文脈化指数は、発話やメッセージの発信が行われている時空との距離と言える。修辞機能「行動」で脱文脈化指数が最も低い [1] の「その本を取って。」というメッセージは、上述の分類では発話機能は「提言」となる。また、情報を提供するメッセージである「私は毎月美容院で髪を切ります。」であれば、主語がその会話のやりとりに参加している「私」なので中核要素は「状況内；参加」、述部のテンスが「毎月…切

表 1: 発話機能・中核要素・現象定位からの修辞機能と脱文脈化指数

		発話機能						
		命題						
		現象定位						
		現在			未来		仮定	
		非習慣的・一時的	習慣的・恒久	過去	意図	非意図		
中核要素	状況内	[1] 行動	[2] 実況	[7] 自己記述	[3] 状況内回想	[4] 計画	[5] 状況内予想	[6] 状況内推測
	参加			[8] 観測				
	非参加							
	状況外	n/a	[9] 報告	[13] 説明	[10] 状況外回想		[11] 予測	[12] 推量
定言		n/a	[14] 一般化					

		脱文脈化指数													
		低													高
		[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]	[11]	[12]	[13]	[14]
修辞機能	中核要素	行動	実況	状況内回想	計画	状況内予想	状況内推測	自己記述	観測	報告	状況外回想	予測	推量	説明	一般化

図 1: 脱文脈化指数

ります」で現象定位は「現在；習慣的・恒久」となり、修辞機能「自己記述」脱文脈化指数 [7]⁽²⁾となる。さらに「昨日駅前に美容院がオープンした。」は、主語がこのメッセージが発信された場以外に存在する「美容院」なので中核要素は「状況外」、述部のテンスが「昨日、… オープンした。」であることから現象定位は「過去」となり、「状況外回想」[10]である。また、「髪の主成分はタンパク質だ。」や「太陽は東から昇る。」のような性質や自然の理とされることは、中核要素が「定言」、現象定位が「現在；習慣的・恒久」で「一般化」[14]と脱文脈化程度が最も高い。

3 分析結果と考察

3.1 メッセージの種類

話者ごとのメッセージの種類の出現頻度を表 2 に示す。この会話では、話者 A が手順を説明し、話者 B は相槌をうちながら聞き、ところどころで返答や意見を述べている。2.2.1 節で述べたように、ここで認定の対象となるのは「自由」と「拘束；形式的従属」のメッセージである。「位置付け」が話者 B で多く、それ以外は話者 A が多い。

⁽²⁾以下、修辞機能は「」で脱文脈化指数は [] で示す

表 2: 話者ごとのメッセージの種類 (太字が認定対象)

メッセージの種類	話者 A	話者 B	計
自由	88	34	122
拘束; 形式的従属	39	5	44
拘束; 意味的従属	52	3	55
位置付け	134	316	450
計	313	358	671

表 3: 修辞機能と脱文脈化指数の頻度

修辞機能 [脱文脈化指数]	話者 A	話者 B	計
行動 [1]	0	0	0
実況 [2]	11	11	22
状況内回想 [3]	7	4	11
計画 [4]	3	0	3
状況内予想 [5]	1	1	2
状況内推測 [6]	2	0	2
自己記述 [7]	24	4	26
観測 [8]	32	2	34
報告 [9]	8	7	15
状況外回想 [10]	2	1	3
予測 [11]	0	0	0
推量 [12]	1	0	1
説明 [13]	34	9	43
一般化 [14]	2	0	2
計	127	39	166

3.2 修辞機能と脱文脈化指数

話者ごとのメッセージの修辞機能と脱文脈化指数の出現頻度を表 3 に示す。「説明」[13] が多く、次いで「観測」[8]、「自己記述」[7]、「実況」[2] が使用されている。以下で、修辞機能と脱文脈化程度の推移から談話の構造を確認する。分析対象部分の大きな内容は「導入→説明→プライベートの話」となっており、説明の中では主に話者 A の「で」という発話が爪磨き手順のステップの区切りとして示され、複数の「説明→経験などの具体例」が繰り返されている。

図 2 と図 3 に脱文脈化程度の推移を示す⁽³⁾⁽⁴⁾。

この会話で、説明内部の各ステップの中では、「説明」[13]、「観測」[8]、「自己記述」[7] と、それ以外の修辞機能が含まれるという構造が見られる。

まず導入では、この会話が始まる前に、話者 A から話者 B に対して指示していたと考えられる、爪磨きキットの説明書に目を通したかどうかを確認するやりとりが行われ、キットを開封し、次いでキットに入っている物についての説明が始まる。「これとこれが~ってゆって、いわゆるやすり。」という 2 つのメッセージは、それぞれ【命題+状況内; 非参加+現在; 習慣的・恒久 → 「観測」[8]】である。その後、話者 A が自身の爪を示して「これね 磨いて四、五日たってる

⁽³⁾ 図の上部の数字は脱文脈化指数を示す。

⁽⁴⁾ 実際にはこれらの間に相槌 (メッセージの種類「位置付け」や認定しない従属節 (メッセージの種類「拘束; 意味的従属」) が多数含まれるが、本発表ではわかりやすいよう修辞機能と脱文脈化指数を特定したメッセージのみを示している。

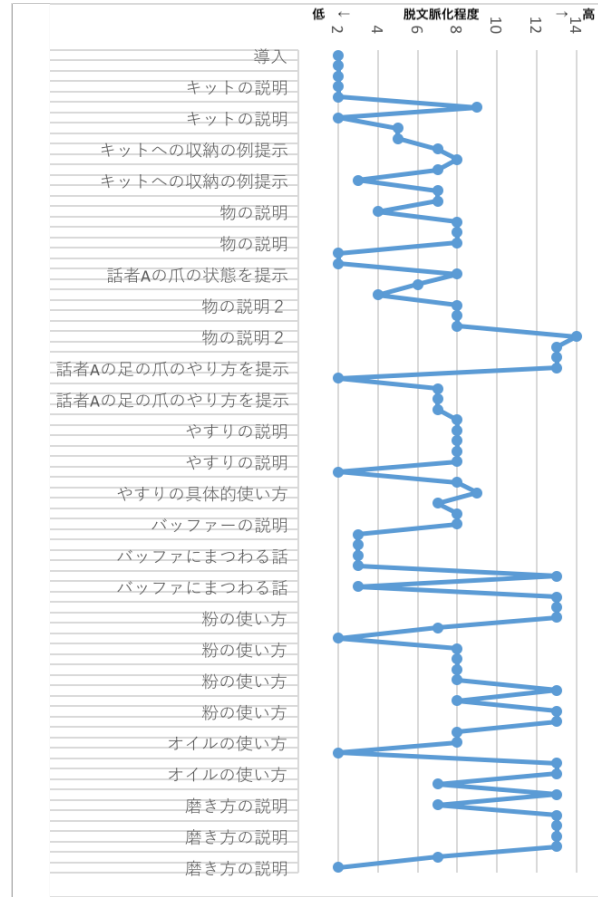


図 2: 脱文脈化の推移 (前半)

かな」(「実況」[2]) と述べ、「最後の仕上げで磨いたらどのぐらい光るかあたしのでやってみますね。」(「計画」[4]) とその後の予定を述べ、次の物の説明に移る。足の爪をお手入れする場合の説明をする場面では、「足の指はけっこうごっついじゃないですか。」(「一般化」[14]) のように最も脱文脈化程度の高い修辞機能も用いている。

異なる種類のやすりの説明「こっちの二つでピンクと白のがあるんですけど」(「観測」[8]) と具体的なやすりの使い方「(私は) みどり使ったりピンク使ったりします。」(「自己記述」[7])、バフファという鹿の皮の説明「バフファってゆうんですけど」(「観測」[8]) と鹿の皮にまつわる昔の話「うちの父とか使ってた。」(「状況内回想」[3]) のように、説明とその説明対象に関わる話題が混ざり合い、脱文脈化の程度も様々である。その後、粉の使い方「こっちがお粉なんですけど。」(「観測」[8])、オイルの使い方「除菌効果とかもある。」(「説明」[13])、磨き方「ポイントはリズムカルに。」(「説明」[13]) のように、一通り手順が説明される。さらに、「血行も良くなるし」(「説明」[13]) のように爪磨きをすることで得られる効果が語

